

る。

二十一カ国から五十一回、延べ六十九人の異国の老若男女を明るく迎え入れられたこと。このもてなし心の愛情は、一時の物好きで続けられるものではない。

イスラム教徒の人々の特異な食事や水の使い方を例にとっても、特別の心遣いと包容力が無ければホームなど続けられるものではない。日本の物静かな農村に、こんなに物識りで、もてなし心の行き届いたホームのパパ、ママがいることに、世話になった異国の客人は深い感銘を覚えたに相違ないであろう。

(石川県 永井 正三)

シベリア抑留回想記

福井県 長谷川 久

私は、兵隊入隊前、満州国、現在の中国東北地区、南満州鉄道株式会社に昭和十七年に入社して、奉天市、現在の瀋陽市の機関区に勤めていた。

昭和十九年に徴兵検査を受けて、甲種合格だった。

昭和二十年五月十七日、牡丹江省八面通の歩兵八十八部隊に現役として入隊。同年七月初め頃、平陽の一二六師団の輜重隊に転属になり、自動車隊として訓練を受け、ソ満国境の陣地構築に参加していたときに日ソ開戦となり、自動車隊として戦闘に参加した。

私の部隊は、ソ満国境の町、綏芬河から牡丹江方面に侵入してくるソ連軍を迎え撃った。戦果は悪く、私たち自動車隊が肉迫攻撃に出動したが、午後四時頃撤退命令が出て、牡丹江市まで撤退した。牡丹江で八面通時代の戦友に会った。前線はいかがと尋ねたら、八面通は敵の手に落ち、何人かの戦死者が出たとのことだった。

今度はハルビンに向けて退くようにと連絡があり、私たちの隊は横道河子まで退き、ここで一戦を交えるとのことだった。一日過ぎて午後二時頃命令が来た。いかに条件が良くとも敵機に対して攻撃してはならないとの命令。すると、間もなくソ連兵が入ってきたが、何もせずに帰った。

午後五時頃、武器返納、弾薬返納ということだった。終戦、停戦、敗戦、いろいろと皆は言うが、武器返納、弾薬返納では敗戦だ。捕虜になったのだ。逃亡する人、自殺する人もいたが、私には何もできなかった。私たちは梅林の収容所に向かい、ソ連の兵隊はハルビンに向かって入る。両者は行き違うのだが、何か良い物があれば、ソ連兵はダバイと言って取り去ってしまう。何もできぬ悔しき、悲しくなった。

幾日か過ぎて梅林の収容所に着いた。梅林では、私たちは自動車隊であったので、収容所の糧秣輸送をやった。拉古にも収容所ができたので、半数ほど分遣になった。

一カ月ほど過ぎて、ダモイ（婦国）というところで拉古に集まり、歩いて牡丹江へと私たちが戦った道を歩いた。牡丹江に入ると、私たちは作業大隊と聞かされたが、ソ連の兵隊に東京ダモイと言われ、半信半疑の気持ちでダバイダバイと言われて歩いた。途中、開拓団の女の三人と出会った。彼女達に、泣きながら「兵隊さん、どこに行く」と尋ねられても答えること

ができない。また、綏芬河を通るときは、電柱の傍らで泣きながら日本の子供が十人近く私たちを見ていた。五十年余り過ぎて、あの婦人子供はどうなっているかと思うと、心が痛む。

歩いてソ満国境を渡り、ソ連の国境の町グロデコに着いた。その夜、本隊は汽車で出発した。ソ連兵は東京ダモイと言うが、信用できなかった。

私たち残留組は町外れの草原に行き、穴を掘って麦わらを入れ、馬のようにその中で眠った。私たちの仕事は草刈りと駅の雑役だったのだが、シベリアの十月、なかなか朝夕がく、また、戦争中のままの夏服だったので、寒さになれていた私にもこたえた。グロデコで、満州人の着る黒い、綿の入った上下服の支給があった。そのため監視のソ連兵は私たちを烏部隊と呼ぶようになった。私たちの私物は何もなかった。ソ連兵が彼らの欲しい物は全部取ったからだ。残っている物は食器がわりの空き缶または飯ごう、衣服と身体があるだけで、今度取られるのは命だけと思っていた。

グロデコの穴蔵生活は十日ほどで、いよいよ汽車に

乗ってシベリア鉄道を走った。汽車は貨物車両で二両に五十人ほどが乗り、中にダルマストーブが一個で、煙突は空気窓から外に出してあった。交替で眠らなければならぬ状態だった。用便は列車が停車したときにするが、停車するとすぐ監視兵が降り、またソ連人が来る。用便するのに一苦勞だった。食事は五人一組で自炊した。粟、高粱、燕麦、大豆であった。自炊なので、全員が一食を済ませるのに半日ほどかかった。

汽車進行中、線路工夫が線路の横に下って上を向いて私たち列車の通過を待っているのに小便をかけたことがある。戸口にいる同僚が「いるぞ」と合図すると、幾人も一斉にする。車両の中ではそのときだけ笑いが起きた。面白いことをしたものだと思う。

幾日乗ったかわからないが、駅で停車していると、後から同じ捕虜列車が停車したので、私がどこから来たのかと尋ねたら、安東と云うので、奉天のことを聞くと、治安が悪く暴動が起きているとのことだった。後から入った列車は先に発車した。一時間後に私たちの列車も出発した。その日の夕方、バイカル湖だとい

う声を聞くと、列車は止まった。皆と同じに降りてみると、大きい湖だった。船も浮いていた。一、二千トン級の船と見受けられる。監視兵が何か浮かれているようだった。ソ連の女の人も集まってダンスをしているようであった。兵隊の交代かもしれない。私も皆と同じに湖に行って水を飲んでみた。真水であった。何か心の隅に残っていた糸が切れたような気がした。帰国の期待が心の中にあっただのか、悲しい気持ちになった。

暗くなって汽車は発車した。貨車の中ではストーブがよく燃えているが、隅の方は寒い。明るくなって汽車は赤松の林の中、白樺の林の中を走る。人家も見えないが、人間は見えない、本当に荒野の町だった。その日の夜も走った。明けて七時頃だったと思うが、タイシエットに着いた。タイシエットで三時間ほど停車し枝線に入った。忘れもしないが、昭和二十年十月二十五日、午後二時頃、ネエブルスカヤに到着した。鉄道の線路が高地にあるので、私たちの入所する収容所の外回りが見える。大きい面積で高さ四メートル近く

板塀があり、内塀は有刺鉄線のようだった。四つ角には高さ五メートルほどの監視塔がある。監視兵の姿が見えた。

夕方早目の夕食を自炊で済ませ、入り口で私物検査を受けて甕いの中に足を踏み入れた。自動小銃を持った兵が私たちの人数を調べるのだが、幾度も数えるので掛け算ができないのだと思った。

連れていかれた所は天幕舎であった。この幕舎でシベリアの冬を越すことができるのかと心配になってきた。舎内に入ってみると、両側に二段になった丸太の寝台があった。中が通路で鉄製のストープが入り口近くと奥の方に二個あった。寝台の高さが低いので座ってはいられず、幾人入れるのかと思ったら、六十人近く入るとのこと、貨車より悪い。寝台も丸太で、天幕は二重になっているが、人間の入る幕舎ではなかった。人間扱いにしてくれないようだった。

シベリアの十月は日が短い。午後五時になるともう暗い。幕舎に入って寝台に上ったが、丸太作りで足が痛いがどうにもならない。横になる幅がない。まとも

に眠ることはできなかった。重なるようになって横になったが、寒い、眠れない。起きて防寒外套、防寒帽子、防寒靴をはき、完全防寒装備で眠ったが、丸太が腕に当たって眠れない。起床の声で我にかえった。頭が上がらない。防寒帽が幕舎の幕と凍りついて離れない。あごのホックを外して起きた。二基のストープはよく燃えているのに、帽子と幕が凍りついてしまうほど幕舎の中も寒かったのだ。

薄暗いカンテラの明かりで朝食が配食されたが、暗くて中身がわからない。口にして初めてわかった。ポトミ粉と乾燥ホウレンソウの雑炊だった。一飲二飲と食しているうちに無くなった。洗わずにその飯ごうを出して昼食の配分を受けた。大豆の炊いたのとジャガイモ三個だった。

仕事に連れ出された。山からの薪運搬だ。前者が作ってくれた薪を、炊事場、ソ連人の官舎、また、自分たちの幕舎のストープ用にするのである。山に入るときは多くの監視兵がついてくる。その中の一人二人は必ず銃を撃っていた。我々に対しての威嚇射撃か逃亡

を防ぐのか分からないが、撃っている。あまり良い気持ちはなかった。銃を持ってダワイ（早く早く）と追い立てる。道が悪く、滑る、転ぶ。身体の弱りに重い防寒装具、身体が自由に動かない。若い私たちにはまだ気力があつたが、年老いた人には気の毒な仕事姿だった。なぜこのような仕事をしなければならないのかと思うと悲しい。泣きながら歩いた日もあつた。早く日本に帰りたい、毎日のように思っていた。寒さも強くなってくる。凍傷になつた人も出てくる。凍傷は最初に鼻の頭がやられるので同僚が知らせてくれるが、足の指の先はわからない。幕舎に入つても凍傷になつたところを体温で溶かしてから暖をとるのだが、足の指先はすぐ火に当てる。次には爪と肉とが分かれてしまう。悪くなると第一関節より切り落としてしまう。私も爪と肉が離れている。

日が過ぎて昭和二十一年の正月を迎えた。私たちは正月のセレモニーを行った。私も一階級上がったので将校宿舎に申告に行った。当時はまだ将校は将校宿舎で当番兵が付いていた。同じ所に仕事に出ても、指揮

者であり、引率者だった。

寒さも厳しく、食料も悪く少ない。体力が衰える。その上の重労働。生きてるのが不思議なほどだった。歩くことさえできず座り込む人もいた。死者は毎日のように十数人出たと思う。多い中隊では一度に二十数人出たと聞いている。私の中隊では、多い日は七、八人出た。昨日まで同じに仕事をし、夜、床の中で共に語つた友が、起床になつても起きない。身体は冷たい。死んだのだ。いつか自分の身にも訪れてくるのではないかと思ひ、自然に日本、父母を思い出して枕をぬらした日は幾日もあつた。泣いても仕方のないことと分かりながら泣いた。

収容所の中では、生きるには食べることだ、食べないと死ぬのだという空気があつた。他の中隊の名をかたつて炊事場より飯の横取りをする中隊、また、食券を作れば偽造する。食事当番が食事の運搬中、途中で襲われてパン、飯をとられる。警備人を付けて食事をとりに炊事場に行くようになった。当番がパン三本（一本二キロ）を抱えて中隊に帰る途中、数人に襲わ

れ、重傷を負って医務室に行ったが、死亡した。私も日本人が日本人の食料を奪い合って食べるようになった。このようなのを餓鬼道と言うのだろう。一方で、食事を他の人より長い時間かけて食べると満腹感を覚える人もいた。食事を水を入れて増し食べた人ほど栄養失調になり死亡した。パンを片手に持ちながら死んでいった友もいた。食する気力がなくなったのだろう。

シベリアの冬は毎日零下三十度以下で、朝夕は特に冷える。シベリアの春はなかなか訪れてこない。多くの死体はどうなったか知らないが、トラックで運ぶと聞いていた。私の中隊も幕舎から木造の宿舎に変わり、幕舎より幾分よくなった。寝台は二段だが、天井が高い。眠る幅も広く、丸太のかわりに板、その上に乾草の布団だった。食事は相変わらず悪い。

ちょうどそのころ民主運動が始まった。委員会に入ると『日本新聞』が貰えるとのことで、同輩も幾人か入会した。当時は五グラムの煙草が支給になるが、巻いて吸う紙がないため入会する人もいた。初めは軍事

葉書を四枚に切り、それを二枚にはがして使用し、それがなくなると、外でソ連人の用をした後の紙の汚れていないところで巻いて吸っていた。

委員会は、将校追放運動を行い、指導者は労働者の手に、戦いに負けて前の軍隊組織が残っているのは妥当でないとしていた。夕食後に、よく会の幹部が演説に来る。私たちは横になり「同志は叫べど聞くは足の裏のみ」と言って寝て聞いていた。

シベリアの寒さも薄らぎ、遅い春が訪れてきた。野に山に若葉がもえてきた。少しは私たちも元気が出てきたような気持ちでしたが、身体が動かない。相変わらず労働はノルマで苦しい。山に仕事に行く人は山菜を炊いて食べたので、毒のある山菜を食べて中毒死亡も出てきた。その頃は監視の兵も少なくなり、一カ所の作業場には一人二人だった。

私たち中隊はネエブルスカヤ地区の建設事務所の当番に当たった。事務所の補修や掃除、また建物の建築で、大工もし左官もするようなことだった。私は大阪出身の木田さんと倉庫番。仕事は、国営商店の人が事

務所で商品の伝票を作って倉庫に取りに来る。その伝票の記入を見て計って渡すのと、倉庫の掃除だった。食品が多かったので、食べるには困らなかった。ただ、「倉庫で食べるのは良いが、外に出すな。むしろ収容所に持ち帰るな。もし分かれば他の人と交代で君は営倉入りにする」とのことで、同僚にも分けることができなかったのは残念だった。

初めはソ連の倉庫の係の人、バラカツソと言うが、仕事で付いていたが、後は私たち任せだった。台秤にかけて少々量を多くしてやると、商店の人は喜んで帰っていく。ソ連人との話し合いが多いので、ロシア語も覚えた。商店のマダムにロシアのそろばんの使用方も習った。また、食堂のマダムと話をするようになり、「冗談も言えるようになるよ、なかなか面白い人達だった。タマール、マルシャ、二人で食事を作っているのだが、タマールは主人がいるらしいが、マルシャは独り身ということで、私に結婚してソ連に永住せよと言ったのだった。そして、「私は今の主人と別れて木田さんと一緒になるのだ」とタマールが冗談を言っ

て笑っていた。

建設事務所の仕事を終えて帰り道、同じに渡満した同僚の荒木君と会った。このシベリアで同僚の人と会え、涙の出るほど懐かしく思った。ただ、「元気で」と言ってお別れた。

良い仕事は長くは続かず、二十二年二月頃、転属ということで、百人ほどソ連の係の人と凍結した雑木林の中を歩いて目的地に着いた。幕舎が幾棟か建っている。前にだれかが住んでいたようである。幕舎の中は汚れていた。相変わらずの寝台だった。仕事は木道の補修と鉄道の路線の補強、また山の土を取るため発破をかける時の火薬を入れる穴掘りだった。私は身体ができていたのとこのことで、上下で引き割りする木挽をやることになった。

十五人の同輩と同じに早仕事の後、また仕事というように、一日を二回に分けて仕事をした。板の使用が多いのでヴィストラ（早く早く）と言われてやらされた。山の穴掘り、伐採に行く人は、山菜を取ってきて炊いて帰り、夕食に入れて食べるのだが、私たち木挽

にはできない。せめて、松の木の赤い皮を取ると白い薄皮があるので、それを焼いて松皮センベイと名付けて食べた。また、仕事場に穴を掘り、蛙、また虫の入るのを待って、十五人が順番を定めて食べていた。ある日、私たちの焚いている火で、山に仕事に行った同僚が、日本の里芋に似た芋を六人で炊いて食べた。すると、急に身体を震わせ、顔色は青くなり、唇の色は変わり、爪の色が黒くなり、六人はその場で亡くなった。今思っても寒さを感じる。死体は監視兵がジュープに積んで運んでいったが、もし医者がいたら、だれかが助かったのではないかと思い、残念だった。医者には、小さい収容所では一、二カ月に一回回ってくるだけで、主に健康診断に来る程度だった。

木挽の仕事で幾日か過ぎた日、早出を終えて幕舎で休んでいると、外が騒がしくなったので出てみると、見知らぬ同僚が十五、六人いる。その中の一人と目と目が合つてすぐ、「長谷川さん」と懐かしい声がかかった。私は「反保君」と言つて抱きついた。荒木君や私たちと同じに渡満した仲間だった。反保君らは自動

車で来て、また山の中に入るそうで、お互いに元気であるようにと話をして別れた。

今度の監視兵は夜になると銃を持って鳥を撃ちに出かけ、朝方帰ってくる。鳥はガンと七面鳥に似たような大きい鳥で、首を持って立つと足が地面につくほどだった。私たちの監視より鳥撃ちの方が仕事のようにだった。

秋近くになると、またダモイ（帰る）の話が出てきた。よくだまされるので気にとめなかったが、いよいよ出発とのことで準備をしていると、ソ連の係から私たち十人は後始末ということで残された。他の同僚はネエプルスカヤの方に自動車を下った。

二、三日で後始末も終わり、係の人と出発というところで歩き出したが、方向はダモイの方向とは違う。仕方なくソ連の係の人四人とともに歩いた。一時間ほど歩くと、前方で四、五人が木道の補修をしているのが見えた。日本人だ。近づくと、彼らも立って我らを見つめた。その中の人が同じに渡満した宮永君だった。よくもシベリアで三人の同僚の友と会うことができ

た、不思議以外にないと思った。懐かしさのあまり話が長くなると、係のソ連人が早く来るように呼んだので、走って列に戻った。係のソ連人が「宮永がいる収容所に行くのだ、夜でも寮に行つて話をしろ」と言った。

幾キロ歩いたか、前方の小高い丘に収容所らしい建物が見えてきた。四八収容所と聞いた。ソ連の地方人の姿も多く見えた。また、発電所もあった。国営商店もあった。ソ連の人の集落ではないかと思った。通り過ぎて四八収容所に着き、収容所は大きい方だと思つた。前にはいろいろな建物もあった。坂を登ると、両側に宿舎が建っている。今通っている坂道には銀座通りと書いてあった。千人近くの同僚が入所しているのではないかと思つた。私たちは六寮に入れられた。六寮は固定した仕事をする同輩で、炊事、医務室、厩室、パン工場、器材庫とそれぞれに異なり、仕事をする時間も異なつた。仕事に出ていく人、また寝ている人と、いろいろな人が入つており、血色も良く、身体も他の人より良い。これも食事の關係だと思つた。

私はうまや勤めをすることになった。一緒に来た室賀さんも同じだった。先輩の佐藤さんと三人で二十七頭の馬の世話をするのだ。一日の仕事を紹介すると、仕事を終わった馬が帰ってくると、燕麦を与えて夜の放牧である。春夏秋はブユが多い。朝明るくなると虫が多く出るので、五時頃馬はうまやに帰ってくる。そして、朝の燕麦を与えて馬方が出てくるのを待つのだが、雨が降ると、虫の出るのが少ないので朝六時頃迎えに行く。放牧の場合は、馬は群れを作つて歩くので、二十頭以上にもなると、必ずと言ってよいほど十メートルほどの間隔で糞をして歩く。その糞の色変わりで時間の測定ができるのだ。濃く色が変わつていればどれくらい前に歩いたと判断する。馬を見付け、名前を呼ぶと、私たちのそばに寄つて来るので、さかさ乗馬しないと歩かなければならないのだ。うまやに帰つて燕麦を与えて馬方が出てくるのを待つ。あとは馬小屋の掃除、馬具の補修等である。

二十二年頃になると、死亡する同僚も少なくなつた。伐採の事故、また病氣とかで死亡する程度で、本

当に少なくなった。入ソ当時は、寒さと食事の悪いの
といろいろの事情も悪く、気持ちが悪いほど亡くなっ
た。私も次か次かと思ひ涙を流したときもあつた。

今は皆と同じく元気で抑留生活を送っている。馬方
が休むと、私がかわつて馬方をやつた。セナコース
(草刈り場)で乾燥した草を集め、白樺の木を馬の両
側に付け、枝をそりがわりにして草を運ぶのだが、よ
く雉を捕ることができた。一羽五ルーブルで民間人が
買ってくれるので、その金で一個六ルーブルのパンを
買って皆とよく食べた。大変苦勞したのは夏のこと
で、ブユが多くいて、早朝より仕事をし、昼休みを長
くとするのだが、火を焚いてその上に生草をのせて煙を
作り、煙の来る方向で休む。普通は煙の流れない所で
休むのだが、反対であつた。汚い話だが、用を足すの
に木に登ってしなければならぬほど虫が多かつた。

仕事をする者は養蜂家がかぶる網の袋をかぶつて仕
事をした。草刈りは重労働で、鎌の刃渡りは一メート
ル近くあり、持ち手の長さ二メートル近いものを両手
で振り、刈り取るので、なれないとなかなかできない

仕事だつた。ノルマに苦しめられた。

四八ラーゲル(収容所)に入つて三カ月過ぎた頃
に、またダモイの話が出てきた。私も室賀さんその
名簿にあるということだつた。収容所内ではダモイの
話でにぎやかになっており、また前の収容所から一緒
に来た係、イリチエンコもうまやに来て、ダモイスコ
ール(早く)、ダモイと言うので、今度は本当かなと
思つていた。何か聞くところによると、私と室賀さん
はイリチエンコの推薦らしいというのだが、信じるこ
とはできなかった。

ちやうどその頃、馬の予防注射をしたので、注射を
した元気な馬は一日休みだつた。体の悪い馬で昼食運
搬に出た。私の当つた馬は前足が悪く、坂などを下
るときには走るので、十分注意をしたが、下つて曲が
るときに馬車の中心棒が前車を押し上げてしまい、二
百人あまりの昼飯の桶を倒してしまつた。飯と言つて
も雑炊だったので拾うことができない。イリチエンコ
が来て「ヨッポイマチ(ばかやろう)」と言つて怒る
けれども、仕方がない。後始末をしてうまやにいる

と、呼び出され、営倉入りだった。食事は皆と変わらず、うまやの同僚が持ってきてくれた。別に監視人もおらず、昼は小さい窓から空を見て故郷を思い涙したことは毎日のようだった。夜は星を眺めて思い出す。たまらなくなって死を覚悟したときもあったが、故郷の山川、父母を思うと、死ぬことはできなかった。帰りたい、帰らなければならぬと思ひ、一日を過ごした。

一週間ほど入っていると、今度は昼は皆が仕事に出る時間に営倉に入り、夜は皆が仕事から帰ってからうまやで眠れるようになった。少しは気持ち晴れるようになり、いろいろと営倉の中での自分の気持ちを話した。本当に帰りたいと。

営倉とうまやの生活が何日か過ぎて、幾人か帰国ということになった。私は収容所の査問委員会が開かれて帰国中止になり、同じ名簿にのった室賀さんが帰国、私は営倉。仕方のないことと思ひながら帰りたい。今思っても残念だった。運命のいたずらか。

帰る室賀さんに、日本に帰り着いたら私の家に手紙

を出してくれるよう、住所を覚えてお願いし、元気でと言って別れたが、悔しい、一人で泣いた。涙が止まらなかった。

忘れもしないが、この年がロシア革命三十周年の年だった。革命のセレモニーを民主委員会主催で行った。日本共産党の徳田球一、レーニン、スターリンを称える集会であった。何か胸の痛くなるような話だった。後で知ったのだが、査問委員会とは、民主委員会の代表、作業委員会代表、収容所内部代表、以上日本人、ソ連の収容所係代表、監視兵代表ソ連人が寄って話し合いをし、事を定めるらしかった。

私の帰国の件では、民主委員会、作業委員会、所内委員会の代表が反対意見、ソ連の委員の代表は賛成だったとソ連人から聞いた。私はそのとき日本人が私の帰国を中止したと思ったが、仕方のないことだった。

十月の末ともなるとシベリアでは朝夕の寒さが身こたえる。防寒装具も支給になつた。糧秣も少しくなつた。寒さに慣れたのか、死亡する同僚も少なくなつた。今思うと、栄養失調で死亡する人も少なくな

り、ただ、伐採作業で負傷しての入院、また、病気で入院する人が多いような気がしていた。糧秣はよくなくても満腹できる量ではない。雪のない時期は野草とか茸、虫、蛙、蛇等がいて食するので空腹感を満たすことができるが、冬になると何も無い。それに寒さは零下を下がる寒さ。人間の生きていて仕事するところではないと思うが、仕事をしなければならぬ私たち。話すことは食事の話ばかりだった。

私が水運搬をやったことを記すと、冬は井戸の内側が凍りついて使用不能になり、河の水を運ぶ。馬糞に桶を積んで運ぶのだが、桶の中が凍って最初の量の半分も運べなくなる。朝、桶の水を取り除くために大きい槌でたたいて取るのだが、桶が破損するので、そこに雪を置き、水を掛けると凍りついて一日仕事ができるような強い寒さだった。

運ぶところは、収容所炊事場、入浴場、ソ連の人の官舎、パン工場、うまや。ソ連人の官舎では、よくマダムにご馳走になった。また、パン工場では、働いている同僚がソ連人の目を盗んで二、三個桶の中に入れ

てくれた。うまやで皆で分けて食べてくれと言って、本当に日本人の友情を感じたのだった。衣食住たりて友情を知る。

また、ソ連の地方の人も、うまやに水を取りに来ると必ずといってよいほど煙草とかパン屑を持ってくる。その気持ちが嬉しかった。家まで運んでやったこともあった。良い人だったと思う。良い気持ちで接すれば、他も良くなるとの実感を得た。

二十三年の春早く、自動車で転属になった。この収容所は五百人ほど同僚がいたが、なかなか民主運動が盛んであった。入る時は革命の歌で迎えてくれた。収容所の権力は労働者が握っているとのこと。恐ろしいところに来たなと思ひ、話を聞いてみると、いろいろと権力争いを行ったらしい。

ある日、月を眺めながら先輩と話をした。内地の住所の話をして、「内地に帰ったら隣の県ですから、連絡を取って家に遊びに来てください」と話をした。すると、次の日、朝、私は自己批判をやらされた。理由としては、内地は、外地で生活して土着民族を搾取抑

庄をしてきたとのこと。外地は日本の侵略者が侵略した土地。遊びに來いとはいまだ資本主義の心が残っているとのことだという。分かったような分からない意味であった。

私も自己批判を行った。自分の気持ちを話し、今後の考えも話した。長く時間をかけたので、民主委員会の人が来て、もう結構と言ったので、演壇を下りた。夜、民主委員会に来るようにと通達があったので、行って話をした。二、三日して青年部をやらないかとのことであったが断った。以後時々委員会に行つて話をした。私も民主委員に入会したが、入らないと生活ができなかった。入会していろいろと運動をした。

半年ほど過ぎて帰国命令が来た。人数五十人でした。各職場で割り当ての人員を推選して、その中にも入つて帰国ということになった。残留者に送られてトラックでタイシエットに着いた。タイシエットから汽車に乗り十三日かかってナホトカに着いた。帰国する同輩がたくさんいた。日本から船が来ないからと言っていた。私たちが四、五日待ったと思うが、いよいよ

よ乗船ということで港に向かった。懐かしい日の丸を付けた黒い船が入っていた。船には信洋丸と書いてあった。夢ではないかと自分の頬をつねってみたが痛い。本当だ。船のタラップを足早に上り、船内に第一歩を踏み入れた。

復員官はじめ船内の皆様が「お帰りなさい、ご苦労様でした」と船内に迎え入れて下さった。大粒の涙が頬を伝わった。幾度か夢見た帰国、これで良かったと思いを我が心に言い聞かせた。

案内されたところは船底であった。薄暗かった。暗くとも良い、船底でも良い、日本に帰るのだと思っていると、船が動いているようだ。「出港だ」と誰か叫んだ。

お米の夕食が出た。幾年か見ることのできなかった米のご飯。じいっと眺めると涙が出てくる。捕らわれて足かけ五カ年、一度食べたいと思いつながら五年の月日。一口、口に入れたが、胸がつかえてくる。皆も同じ気持ちだったと思う。

船中でいろいろなことがあった。食事に配られた乾

パンに幾匹かの虫が入っていて船医さんをお願いしたこと、また、船員さんが夜中同僚に面会に来たが、不寝番が明日にしてくれと断ると暴力を受けたことで、船長さんにそのようなことがないようにとお願ひしたことが思い出される。

甲板にいた同輩が、陸が見えるのと知らせてくれた。

出てみると、見える陸が日本だ日本だと言つて喜んだ。胸にこみ上げるものがあつた。ぐうと唾とともに飲み込んだ。

船は舞鶴湾に入った。日本の山々が見える。復員届を出すのに二、三日船にいた。届けが終わり、いよいよ上陸。栈橋を渡り、帰国第一歩を日本の土を踏んだときの嬉しさは書き表わすことはできない。出迎えてくださった小学生またご婦人、皆さん本当にありがとうございました。私物検査も身体消毒も終わり、宿舎に入り帰国第一夜を送った。小学生の歓迎の劇を見せていただいたのも覚えてる。

帰国に際して千円をいただいたが、お金の価値のないのに驚いた。ソ連では入ソ当時は二キロパンが闇で

八十ルーブルと聞いていたが、帰国近くになると同じパンを六ルーブルで私たちに分けてくれた。煙草（マホルカ）も一番安価なもので五ルーブルも買えば一カ月の煙草が充分あるようになった。本当に驚いた。日本ではミルクキャラメル一個三十円、眼鏡一個五百円だった。

米国の二世の兵隊さんにソ連での活動のことについて調べられた。そのとき初めてたばこを吸った。嘘を言わないようにと言われた。嘘を言っても前に帰国した同僚が私のことは話しているからとのことだった。そうだったら何も言うことはない。「そうです」「そうです」と答えてきた。

帰郷ということで私たちは自動車で駅まで出た。駅に着いてみると、父の顔とその傍らに妻の顔も見えた。まだ私に気付いていないようだった。私は車両長だったので、皆が下りた後で自動車に積んである皆の荷物を渡して、父のところに行つた。何も話をするとはできなかった。ただ三人が抱き合つて涙を流すだけだった。

福井駅に到着。ホームで北知事の歓迎の言葉を聞き、石川、富山方面に帰る同僚を見送って、郷里大野行ききの電車に乗った。懐かしい大野弁、迎えの知人と話をしているうちに大野駅に着いた。改札口で万歳の声が聞こえる。

駅前に出ると中保の区民の皆様が多数迎えに来ていた。また、中保区と記した区の旗を見ると胸が詰まった。この旗で送られ、死んで帰りますと心に言い聞かせて出たのにとすると、心苦しい気持ちと恥ずかしい気持ちだった。だが生きて帰国できて嬉しかった。

家に着いて、家を一回りして皆様の万歳を受け、母の顔が見えたので抱きつきに行き、大声で泣いた。何も見えない。白髪の母の顔しか見えなかった。今まで涙を流したことは数知れないが、大声で泣けたのは母の腕の中だった。その母も今はいない。命があればちやうど百歳となるが、きつと父母はあの世から私たちを見守ってくれていると思っっている。

最後になりましたが、シベリアで亡くなった多くの皆様のご冥福をお祈りいたしまして筆を止めます。

【執筆者の紹介】

長谷川さんは、帰郷以来、農業の傍ら尊い体験を活かし、各種団体の公職に積極的に取り組んでおられます。青春時代、満州の天地に青雲を抱き満鉄に入社。昭和二十年五月、現地入隊。終戦後、シベリアの収容所を転々として、昭和二十四年に帰郷されました。

長谷川氏の経歴

生年月日 大正十三年三月二十三日

昭和十六年七月 満州国錦州省黒山県小東 小東満

鉄訓練所入所

昭和十七年四月 満州国南満州鉄道株式会社入社、

奉天機関区勤務

昭和二十年五月 牡丹江省八面通八八部隊入隊

七月 牡丹江省平陽一二六師団輜重隊に

転属

八月 ソ連参戦、横道河子にて敗戦

十六日武装解除を受ける

十月 ソ連タイシエツト地区ネエブルス

カヤ五四収容所に入る

昭和二十一年二十四年 四〇、一〇、二八各收容所を

転属する

昭和二十四年七月二十六日 舞鶴に上陸帰国

七月三十日 郷里現住所に帰る

(福井県 林 俊男)

シベリア抑留を顧みて

福井県 尾上敏雄

あの厳しかった抑留生活から解放されて五十有余年が過ぎた。その頃の記憶は薄れていくが、是非とも忘れてならないことだけでも、断片的だが書き残したい。

私は昭和二十年二月初め、中部第三六部隊(敦賀)より、新設部隊要員として、満州国黒河省孫呉に到着、同年四月五日に第一一七師団、第二七〇連隊が編成された。連隊長は宮城に出向き軍旗拝受。私は同連隊の通信中隊の内務係を拝命し服務した。

同年八月一日遼陽の幹部教育隊に派遣、その教育に専念。その頃戦況は日ごとに悪化するばかりで、八月九日ついに日ソ開戦となった。でも我々の教育はその時点では続行していた。十三日になって解散し直ちに各自、原隊復帰の命令が出た。私は孫呉の同僚とともにハルビン市まで行き、原隊へ連絡するも応答なし。そこでハルビン市内防衛の混成第一三一旅団司令部に仮配属となった。当時のハルビン市内日満会館には旅団長司令部があり(旅団長井部信時少将)、私は司令部の通信業務に従事することになった。

八月十五日ついに来るべきものが来た。正午、天皇の玉音放送があった。私は通信室で日本の降伏を知り、筆舌に尽くし難く空しさ、敗戦の惨めさに涙が出てきた。

思えば渡満してわずか六カ月。日満会館に集結した同僚の一人は、敗戦を悲しんで拳銃で自殺した。たしか二十日の日だったと思う。ソ連軍の命令で、ハルビン市郊外の某日本兵舎に移動し、そこで武装解除された。この時点でソ連軍の指揮下に入り、本当の捕虜扱